

令和5年9月定例会 総括審査会

円谷 健市委員

円谷健市委員

県民連合の円谷健市である。議員として最後の質問になるが、よろしく願う。

最初に、再生可能エネルギーについてである。この問題はこれまで何度も他の議員から質問が出ているが、改めて質問する。

本県では東日本大震災と原発事故後、復興に向けて、原子力に依存しない安全・安心で持続的に発展可能な社会づくりを目指し、再生可能エネルギーの導入拡大と関連産業の育成・集積を進めている。これまでの12年間で様々な取組が進展し、令和4年度には再生可能エネルギーの導入量が県内のエネルギー需要と比較し50%を超えるなど一定の成果が上がっている。

一方で、日本はエネルギー自給率が低く、近年の世界情勢の影響を受けた化石燃料の価格高騰により、我々の生活に大きな影響が出ている。こうした事態に対応するためには再生可能エネルギーの有効活用が重要であり、自立、分散型エネルギー社会の実現を目指すべきと考える。

そこで、再生可能エネルギーの地産地消を推進すべきと思うが、県の考えを聞く。

企画調整部長

再生可能エネルギーの地産地消は、地域と共存する再エネの推進、電気料金の負担軽減や非常時の電源確保など県民生活への貢献、さらには不安定な国際情勢下におけるエネルギー安全保障等の観点から重要性が高まっている。こうしたことから、今年度から自家消費型の住宅用太陽光発電設備の導入を支援する制度を創設したところであり、引き続き県民のニーズや社会経済情勢等を踏まえつつ、再エネの地産地消の推進に取り組んでいく。

円谷健市委員

地産地消で地域が自立できることが本当に重要だと考えている。本県は、再生可能エネルギー先駆けの地を目指した取組を進めている。私はこの「先駆けの地」という言葉を何度も使っているが、先駆けの地というものがぴんとこない。

そこで、県が掲げる先駆けの地とはどのような姿なのか、将来像を聞く。

企画調整部長

本県では東日本大震災と原発事故以降、「原子力に依存しない安全・安心で持続可能な社会づくり」との復興の基本理念の下、再生可能エネルギー先駆けの地の実現に取り組んできた。具体的には、2040年頃を目途に、県内のエネルギー需要の100%に相当するエネルギーを再生可能エネルギーから生み出すとの目標達成を目指している。この目標達成に取り組むことが、福島の復興・創生の実現に資するものと考えている。

円谷健市委員

目標に向かって進めており、2040年にある程度目標が達成できるとのことであるが、私が本当に述べたいことは、エネルギーの活用について県がもう少し前向きに取り組んでほしいとの要望である。

再生可能エネルギー先駆けの地とは、地域の特徴を踏まえた多様な供給力を活用することにより、再生可能エネルギー面で自立できる地域だと考えている。そこまで進んで、先駆けの地と言えらると思っている。

再生可能エネルギーで自立できる地域の実現を目指し取組をさらに推進すべきと考えるが、県の考えを聞く。

企画調整部長

委員指摘のとおり、再生可能エネルギーを地域で活用することは、再エネが地域と共存し将来にわたって維持されていく上で重要な視点であると認識している。地域で必要となるエネルギーの全てを再エネで賄う仕組みを構築するには、現時点で様々な課題があるが、引き続き社会経済情勢なども踏まえつつ再生可能エネルギーの地域における活用を推進していく。

円谷健市委員

ぜひ全国先駆けの地と言える、誇れる地域を目指して頑張ってもらいたい。

次に、地域農業を支える多様な経営体への支援についてである。

農家の高齢化や後継者不足が進む一方で、法人化による農地の集約と経営の大規模化が進む中、2030年には農業従事者、農業経営体共に2020年の半以下になると予想されている。本県も同じ状況であり、基幹産業である農業が10年後にどうなるか心配である。

多面的機能を持つ水田を耕作することは、地域の環境を守ることはもとより米の安定供給に大きな役割を果たしているが、それを担う兼業農家も高齢化や後継者不足による廃業が多い。農業を辞めることによって農地が荒れて地域が衰退してしまうことを強く懸念しており、こうした兼業農家などの多様な経営体の取組が、地域を支えるために非常に重要であると考えている。

そこで、県は地域農業を支える多様な経営体をどのように支援していくのか。

農林水産部長

農業を副業的に営む多様な経営体については、本県の農業経営体数の7割を超え、地域の持続的な発展に大切な役割を果たしている。このため、一層の所得確保や経営の安定に向け、収益性の高い園芸品目の導入や地域農産物を活用した6次化商品の開発に補助するほか、集落営農への参画促進や機械の共同利用に対し助成する等により、引き続き本県の地域農業を支える多様な経営体を支援していく。

円谷健市委員

地域農業の支えとして、集落営農がある。本当に大事な営農組織であるが、やはり高齢化や後継者不足の問題を抱えている。

中山間地域の農業を守っていくことが、これからの食料の安定供給につながる。解決は本当に難しいが、中山間地域の兼業農家を支えてほしい。

次に、地域の農業を担う人材育成についてである。

地方において過疎化、人口減少が進む中、地域の農業振興と後継者育成が喫緊の課題である。このような中で農業高校には、農業や農業関連産業を通して地域社会の持続的な発展を担う人材として必要な資質、能力を育成することが期待されており、地域社会における農業高校の人材育成は大変重要な役割を担っている。就農人口が減少する中、農業の魅力や楽しさを若いうちから学び、経験することは大事である。

そこで、県教育委員会は県立農業高校において地域の農業を担う人材の育成にどのように取り組んでいくのか。

教育長

県立農業高校では、地元企業等と連携して地域の伝統野菜の栽培や地場産物を加工した6次化商品の開発に取り組むとともに、地域農業の活性化について探究するなどの学びを通じて、農業への関心や就農への意欲向上につなげ、地域農業を担う人材の育成を図っている。

今後とも各校で魅力ある取組の情報発信を進め、農業高校への関心を高めていく。

円谷健市委員

私も農業高校出身であり、農業高校の重要性に係る理解促進は本当に大事な課題だと思っている。

人材育成については教育長の答弁のとおり、まず生徒を集めるため農業高校に関心を持ってもらう必要がある。農業高校生が地域農業や地域社会の発展に寄与する人材に成長することを期待するが、これからは少子化等の影響により生徒数

の減少が懸念される。農業高校に興味、関心を持ってもらうためには、農業高校の魅力を発信していくことが重要である
と考える。

そこで、県教育委員会は県立農業高校の魅力を発信にどのように取り組んでいくのか。

教育長

県立農業高校における魅力の発信については、各校での農産物販売会の開催や地元のイベントへの参加のほか、県内の
農業高校が協力し開発した加工品等を東京やインターネット上で販売するとともに、高校に小中学生を招き高校生が担当
する実習を体験してもらうことで、学習内容を理解し将来の進路選択へのきっかけをつくるなどの取組を行っている。

今後とも農業高校における魅力ある取組を積極的に発信し、人材育成につなげていく。

円谷健市委員

生徒が農業高校に関心を持ち、入学してもらうことが本当に大事である。基幹産業である農業を大事にし、楽しみなが
ら学校生活を送れる工夫をしてほしい。

次に、河川の災害対策についてである。

県では、水害対策として堤防のかさ上げや河道掘削などの河川整備を進めているが、日頃目にする県内の河川の中には、
河床に土砂が堆積し川幅が狭くなっている箇所があり、流下能力が著しく低下しているのではないかと考えている。

近年、全国各地で線状降水帯等による豪雨に伴う水害が発生している。水害を防ぐための堤防の整備は大変重要である
が、水害発生リスクを低減するためには、河川の現状を踏まえて適宜河道掘削を行うことが重要ではないかと考える。

そこで、県は県管理河川における土砂の堆積状況をどのように把握し河道掘削を進めていくのか。

土木部長

河道掘削については、豪雨災害への備えとして適時適切に実施することが重要であることから、日常の定期的なパト
ロールや大雨による増水後の点検に加え、住民や市町村からの情報等を基にした随時の現場確認を行うことにより、河床の
土砂の堆積状況を的確に把握し、増水時に流れを妨げるおそれのある箇所において適時実施している。

引き続き、住民の安全・安心を確保するため効果的に河道掘削を進めていく。

円谷健市委員

河道掘削に関しては、私が土木委員会に所属していた3年前から、県でかなり多めに予算をつけて取り組んでいた。線
状降水帯による集中豪雨などを考えると、安全・安心な地域を守るためというのはなかなか難しい気がするが、リスクを
より減らすためにも頑張ってもらいたい。よろしく願う。

最後に、礼を述べる。

今日は議員として最後の質問になった。2011年の東日本大震災と原発事故が発生した年に議員になり、当時は右も左も
分からないままこの未曾有の複合災害に取り組み、12年になった。浅学非才の私が12年務められたのは、各議員の支援と
県当局の指導のおかげであり、感謝と礼を述べる。

東日本大震災と原発事故からの復興は目に見える形で進んでいるが、まだ道半ばだと思う。また、少子高齢化社会の中
で、人口減少問題や物価高騰など様々な課題が山積しているが、県民一丸となって前を向いて歩んでいくことで、福島
の明るい未来は見えてくると思う。

皆の今後ますますの活躍を祈念して感謝と礼の言葉とし、私の質問を終わる。

